

査読論文

ヴェンセスラウ・デ・モラエスの日本語会話能力 — 会話能力の検証および会話内容からみえる人物像について —

佐藤 征弥¹⁾・高木 佳美²⁾・石川 榮作³⁾・宮崎 隆義⁴⁾

- 1) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 〒770-8513 徳島市南常三島町 2-1
E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp
- 2) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部総合技術センター, 〒770-8513 徳島市南常三島町 2-1
- 3) 放送大学徳島学習センター, 〒770-0855 徳島市新蔵町 2-24
- 4) 徳島大学教養教育院, 〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1

Wenceslau de Moraes's Proficiency of Japanese Language: His Speaking Ability and Personality

Masaya Satoh¹⁾, Yoshimi Takagi²⁾, Eisaku Ishikawa³⁾, Takayoshi Miyazaki⁴⁾

- 1) Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University, Tokushima 770-8502, Japan. (E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp)
- 2) Center for Technical Support, Tokushima University, 770-8506, Japan.
- 3) The Open University of Japan, Tokushima Study Center, 770-8502, Japan, Tokushima 770-0855, Japan
- 4) Institute of Liberal Arts and Sciences, Tokushima University, Tokushima 770-8502, Japan.

Abstract

A Portuguese writer Wenceslau de Moraes spent his later life in Japan since 1897; he never left Japan until 1929 when he died. It is said that his speaking ability of Japanese language was not good although he lived in Japan more than thirty years. In this study, we investigated his speaking ability of Japanese based on the written memories of those who had direct discourse with him. The records of his speech were limited to the memories of his neighbors, a Buddhist nun who regularly came to his house, and a newspaper reporter from Osaka who interviewed him.

Except for the words of affirmation or denial, the word that appeared most frequently in his speech was "kawaiou" or "kinodoku" that means "pity" ("piedade" in Portuguese). "Piedade" is the important key word of his masterpiece *Ó-Yoné e Ko-Haru*. In the preface to the book he quoted the sentence "A litteratura do futuro será a Litteratura da piedade" from Pierre Loti's work, and he wrote *Ó-Yoné e Ko-Haru* as a literature of pity. Therefore, his deep sympathy for vulnerable and oppressed existence was the propensity of his character shown in both his works and his real life.

"Kawaii / kawairashii" (lovely) and "shinsetsu" (kind) are also the words he used frequently in his conversation with his neighbors.

As for the grammar of Japanese language, Moraes did not seem to have mastered postpositional particles and conjugation of verbs. Two persons referred to his speaking ability of Japanese as follows: a newspaper reporter who interviewed Moraes wrote that “he speaks in simple Japanese” in his article, and a pastor who sometimes visited Moraes’s house said that “his Japanese was not good, but he spoke familiar Japanese slowly”. The reason why Moraes’s Japanese did not improve is said that he did not want to associate with intellectual people here in Tokushima. On the other hand, he greeted familiarly and often exchanged gifts with his neighbors. He pointed out that Japanese people is a pleasant neighbor in his work *Relance da Alma Japoneza*, and he also tried to be a good neighbor to those he knew as well. There would have been no need for a formal and complicated conversation for him for that purpose.

key words : Proficiency in Japanese language, speaking ability of Japanese, kawai sou, kinodoku, piedade, Pierre Loti, pity, Wenceslau de Moraes

1. はじめに

人生の後半を日本で過ごしたポルトガル人作家ヴェンセスラウ・デ・モラエス (Wenceslau de Moraes) は、1897 (明治 30) 年にマカオから神戸に移住して以降、亡くなる 1929 年まで一度も日本を離れることはなく、日本で暮らした。1913 年 (大正 2) にポルトガル領事の職を辞して徳島に移ると、市井の一市民として暮らしながら日本に関する著作を祖国ポルトガルで発表し続けた。

モラエスは万事日本風の生活を送り、本国ポルトガルでは、生前中に「日本の魂に取替えた人」という評がたった¹⁾。日本においても、モラエスの死後、彼の顕彰に尽くした湯本二郎は「葡萄牙生れの日本人モラエス先生」と評し²⁾、学生時代にモラエスにポルトガル語を習い、後年彼の作品の翻訳を手がけた花野富蔵もまた『日本人モラエス』³⁾という伝記を著すなど、日本に同化しようと努めたモラエスを「日本人」と評する声があがった。⁴⁾

しかし、30 年以上にわたり日本で生活したにもかかわらず、モラエスの日本語は決して達者とはいえなかった。彼を知る人たちが語るのは、片言の日本語で話すモラエスである。といっても、現在モラエスに関心を寄せる人たちの間でも、モラエスがどの程度話せたのかについて捉え方に隔たりがあり、ほとんど喋る事ができなかったと

考えている人もいれば、不自由なく生活していたと考えている人もいる。それは、今日までのモラエス研究において、モラエスの日本語の会話能力について深く掘り下げられてこなかったことによる。そこで本稿では、モラエスが日本語でどの程度意思疎通ができていたのか、モラエスと話したことのある人物が記した彼との会話の記録を基に検証し、さらにそこから分かる彼の生活ぶりや人柄について考察した。

2. 資料と会話内容

モラエス関連資料の中から、モラエスの会話が記されているものを探し、伝聞ではなく、直接彼と会話した当人の証言をまとめ、表 1 に示した。証言者の記憶によるものなので、モラエスがしゃべった通りに再現されているとは決して言えないが、外国人と触れ合うことがほとんどない当時の徳島の人々にとって、モラエスと話すことは強く記憶に刻まれる経験に違いなく、判断材料として信用をおくことができると考える。

表 1 は、資料の古いものから順に並べてある。以下、資料と会話内容について説明していく。

① 『憂曇華』

モラエスが亡くなった翌年の 1930 (昭和 5) 年に出版された『憂曇華』⁵⁾ は、晩年の数年間、

モラエス宅をしばしば訪ねていた濱本房子が呼びかけて、モラエスと交流のあった人々による追悼文をまとめた本である。房子はモラエスと最も親しかった知人の一人であり、七回忌にあたって徳島毎日新聞社が主催された「モ翁を偲ぶ座談会」では、「徳島としてモラエス先生を知る第一人者」と紹介されている⁶⁾。モラエスと出会ったのは、本人の談によれば尋常小学校4年の頃から9歳か10歳の時であろう。学校の登下校の際によく会い、最初は怖かったが、だんだんとなれて挨拶を交わすようになった。家に通うようになったのは、「大正13、14年」と語っているので⁷⁾、交流があった歳月は5、6年になる。

①-1 「追憶」

執筆したのは編者である濱本房子である。房子は「追憶」の中でモラエスとの交流を詳しく書き記していて、会話の描写も多い。その中で注目すべきは、死期が迫りつつあるモラエスが「私書けません」、「私思ひます暑くなります私體よくありません」と訴えていることであり、こうした悩みを打ち明けていることは、房子に心を許していたからだろう。さらに、身体が動かなくなった時のことを心配して、「私病氣重くなりましたら…おまはん知らず来て下さる」と頼んでいる。房子を「おまはん」と呼んでいることも、他の者の証言には出てこない言葉であり（「あなた」と呼んでいる）、年の離れた房子にだけ使う言葉であったのだろう。

①-2 「嗚呼モラエス翁」

執筆した岩本朋三郎も晩年のモラエスと最も親しかった知人の一人である。モラエスが住んでいた長屋のすぐ近所に住んでいた。交際があったのは、最後の数年であったとこの文章中に記しているが、その付き合いは深いものであり、足が弱り、遠くへ出かけることができなくなったモラエスは頻繁に岩本家を訪れていた⁸⁾。また、後述するように、モラエスがリュウマチで散歩ができなくなってからは岩本が朝夕二回必ずモラエス宅を訪ねて身体を気遣っていた。

モラエスは岩本を信頼できる人物であると思ったのだろう、自分が亡くなった際の葬儀の手配

などを岩本に託した。岩本はその時のことを「翁病篤く再び立つ能はざるを知るや一日予に語りて曰く「我孤獨にして且つ異郷に假寓し頼るべきなし、君幸隣保の因を以て病翁終焉の日は諸事の隻者たらん事を庶幾す」と記している。直接話法ではあるものの、モラエスの言葉が漢文口調になっており、文章に合わせて言葉遣いを改変していると考えられる。

岩本とモラエスの関係を示すエピソードとして、1928（昭和3）年に堺市の豪商柳原吉兵衛が堺鉄砲記念碑を建立し、その除幕式にポルトガルにゆかりの深い人物としてモラエスを招待する話が持ち上がり、岩本が仲介役を務めたエピソードが、モラエスの伝記『モラエスの旅』に載っている⁹⁾。

①-3 「モ翁よ安らかれ」

執筆した古角勝はキリスト教会の牧師であり、時々モラエスの家を訪問していた。ブロークンイングリッシュで会話したと座談会で語っているので、表に記した会話も日本語ではなかった可能性がある。会話においては、音楽会に誘われたモラエスが、人が大勢いる所には行きたくないという理由で断っている点が興味深い。

モラエスは古角に対して気をゆるしてはいなかったようで、古角は、自分はモラエスから敬遠されていたようだと言っている。物書きであることははっきりと言わなかったし、書齋を見せてくれという頼みにも応じなかったという¹⁰⁾。キリスト教に懐疑的であったモラエスは、牧師である古角と宗教について議論することを避けたいと考えていたのではないか。一方、古角はモラエスを無神論者であったと考えていた。

①-4 「ありし日のモラエス氏を訪ふ」

大阪朝日新聞の記者野上溪三による「ありし日のモラエス氏を訪ふ」は、タイトルの印象からすると、モラエスの死後、彼を偲んで書かれたように受け取られるが、内容を見ると生前に発表された記事をそのまま転載したものである。出典は記されていないが、大阪朝日新聞のシリーズ企画「キク人ハナス人」にモラエスが紹介されたという記事がこれであろう¹¹⁾。本書を作成する際に

濱本房子が、この記事に「ありし日のモラエス氏を訪ふ」という題をつけて転載したものと推測される。後に作られた『モラエス案内』⁷⁾の中でも出典不明のままこの記事が転載されている。

インタビュアーである野上記者は「モラエス氏は素朴な日本語で語る」と書いており、会話能力を評価するうえで貴重な情報である。記事の中で、モラエスの語った内容は直接話法で紹介されているが、他の資料に比べてこなれた日本語になっているので、記事にするにあたって多少手直しされていると思われる。例えば「訪歐飛行」という言葉がモラエスの口から出てくるとは考えにくい。なお、ここで出てくる朝日新聞の訪歐飛行とは、朝日新聞の企画で初風号と東風号の2機の飛行機が1925（大正14）年7月25日に立川を出発し、ヨーロッパ各地を回って10月27日に帰国したという、当時としては大変な壮挙であった。モラエスが読めないなりに新聞を見ていたと語っていることは興味深い。

また、おヨネを「ともだち」と呼んでいる点も興味深い。モラエスの死後見つかった遺言状には、おヨネのことを“*minha querida companheira*”（私の愛する伴侶）と記しており¹²⁾、また『おヨネとコハル』の中では愛した女性であると告白しているが、人前では、そのような表現をしなかった。

①—5 「ゆきし異域の孤客モラエス翁」

「ゆきし異域の孤客モラエス翁」を執筆した小雙山房主人については『憂曇華』中に実名が見あたらず、これまで誰であるか特定されていなかった。しかし、文章中に鳥居龍蔵を手伝って城山貝塚の発掘をしている時にモラエスが見物に来たことが記されており、モラエスと交流があって、かつ城山貝塚の発掘にも携わった人物ということで、前田正一と断定される。前田は郷土史家であり、1921（大正10）年に現在国指定天然記念物となっている「阿波の土柱」について土柱を世に紹介した柏木直平とともに、全山の実景に対して「三山六嶽三十奇」の部分名称を命名している¹³⁾。

前田はモラエスの長屋の近所に住んでいたが、最晩年まで交流がなかった。前田が方面委員（現在の民生委員の前身）を務めること

になり、モラエスのことを良く知るためにモラエス宅を訪ねたのが最初らしい。この時、モラエスは不在であり、前田の来訪を知ったモラエスが後日前田を訪ねた時の会話が、この寄稿に紹介されていると考えられる。徳島市で方面委員制度が創設されたのは1927（昭和2）年であり¹⁴⁾、この会話もその頃のことだろう。

前田に対してモラエスが徳島の風景について語ったり神道の話詳しくしていることは、古角に対してキリスト教の話 avoided のとは大きな違いである。筆者はモラエスの宗教観および神道に対する考えかたについて考察したことがある¹⁵⁾。モラエスが日本の神仏に対して非常に信心深かったことはモラエスの行動を調べた花野富蔵氏による『日本人モラエス』の中に描かれている¹⁶⁾。それによるとモラエスの朝の習慣は、午前6時前に起床したのち「神棚に燈明を点じ、新鮮な榊や新芽松を供へて、神さまを拜む。次いで、佛壇にも燈明と線香と新鮮な花とを供へ、茶や供物をお祀りする。さうして、始めて、彼の日課にとりかゝる」というものだった。また、神棚に町内の氏神である諏訪神社のお札を収め、台所には荒神を祀り、裏庭には地蔵を祀って拜んでいたという。

モラエスと前田の交流はその後深まることはなかったが、モラエスが亡くなった後すぐにかけて、葬儀の手配や各方面への対応は、主に前田があたった。モラエスは自分の死後のことを上記の岩本に頼んでいたが、岩本は仕事があったため、自営業の前田が岩本に代わって行ったのである。前田はその後も毎年命日に有志ら数人でモラエス忌を営んだ。

①—6 「朝露追想」

執筆者の紫雲智賢は慈雲庵の尼僧である。毎月二十日のおヨネの月命日にモラエス宅を訪れて仏壇に回向を行っていたが、コハルが亡くなったからは月命日の二日も加わり、月2回モラエス宅を訪れた。モラエスが亡くなるまで16年間通い続け、モラエスは自分が亡くなったならその仏壇を智賢の庵に預ける約束を交わし、その約束を果たした。モラエスは智賢に感謝していたのだろう、「朝露追想」には彼女に対して「親切」という言

葉を何度も使っている。なお、モラエスは作品の中に智賢を登場させており、『おヨネとコハル』¹⁷⁾の「無臭」に登場する尼僧が彼女である。

①—7「ゆきしモラエス翁」

渡邊華子は①—5で紹介した前田正一の妹である。モラエスが亡くなってすぐに、週刊の全国紙『婦女新聞』にモラエス追悼記事を寄稿した¹⁸⁾。本書の「ゆきしモラエス翁」は、その記事を転載したものである。ここに出てくる尼港事件とは、1920(大正9)年、アムール川河口の港町ニコラエフスク(尼港)において、日本の軍人や在留邦人がパルチザンに殺された事件のことであり、彼女はその義損金を募るためモラエス宅を訪れた。軍人であり外交官であったモラエスは、徳島隠棲後もこのような情報には敏感であったから、当然この事件のことを知っていたのだろう、「少しです」と言って義損金を出したのは、日本の生活にすっかり慣れた態である。

前田兄妹は仲が良かったようで、正一が亡くなった後に出版された未発表稿をまとめた追悼本『阿波月明かり』¹⁹⁾に華子が序文を書いている。この『憂曇華』においても二人の寄稿のタイトルが似ているが、正一が華子の記事を踏まえてこのようにしたものだろう。

①—8「おゝ尊き方」

執筆者は花屋米店主人となっていて、実名は記されていないが、モラエスがよく通っていた米屋の多田ヨネである。後述の「モラエスさんを懐かしむ座談会」で、モラエスは自分にはなんでも話したと語っているように、店で忙しく働いていると「イソガシイネ」と笑いながら話しかけたり、食べ物をモラエス宅に届けに行った時に彼女の人相を見て「アナタ、カネモチ、ナリマス」といったように、気楽に会話を楽しんでいる様子が窺われる。

②「モラエスさんを懐かしむ座談会」

1935(昭和10)年はモラエスの七回忌の法要が盛大に営まれるとともに、モラエスの顕彰活動が盛んに催されたが、それはこの年に徳島県の学

務部長として赴任してきた湯本二郎の力によるところが大きい。

徳島日日新報は、「モラエスさんを懐かしむ座談会」を主催し、6月18日から6月27日にかけて紙面にその模様を載せた²⁰⁾。出席者は、徳島県学務部長・湯本二郎、光慶図書館長・坂本章三、徳島中学教諭・小出植男(隣人)、方面委員・前田正一、家主・中山孫七、隣人・橋本富蔵、最も親しかった・森房子、懇意な八百物商・佐々木新一、懇意な米商・多田ヨネである。また、主催した徳島日日新報社からの参加者に松村益二がいるが、子供時代に実家の菓子屋で店番をしている時に、頻繁にお菓子を買いに来ていたモラエスを記憶している。

表1に示したモラエスの会話の中から彼の人柄が分かるものを3つ次に紹介する。一つは、長屋の隣に住んでいた橋本が「妻がつわりを病みますと「隣のオクサンコレデスナ」と手を擴げてお腹の大きい形をするんです。」と語ったエピソードである。モラエスは、著作やポルトガルの親族・友人に宛てた手紙には笑い話や冗談をたくさん書いており、実生活でも隣人の橋本や前述の多田ヨネに対しては気安く冗談を言っていたようだ。モラエスは橋本一家が好きだったようで、庭で家族で賑やかに行水をする様子や、橋本が家族のために本を朗読する様子を作品の中に書いている²¹⁾。

また、森房子(旧姓濱本)は、モラエス宅で遊ぶ子供たちが、置いてある物にさわると「アナタソレハイケマセン」「イラウ(触る)トワタシ、コマリマス」と言って止めさせたエピソードを紹介しているが、モラエスが子供に対しても「あなた」と呼んだり「です・ます調」の丁寧な言葉で接していたことが分かる。

もう一つ佐々木新一が紹介した昭和天皇が皇太子の時に徳島を訪れた際に奉迎に出かけた際のエピソードも興味深い。時期は1922(大正11)年11月で、徳島市二軒屋町の忌部神社に皇太子がご参拝された際、モラエス宅に近いことから奉迎に出向いたが、外国人を不審に思った警官に追い返された。戻ったモラエスは八百物商を営んでいる佐々木の店に来て、佐々木の祖母に向かって愚痴をこぼし、「私は横濱の軍艦の上で明治天皇

に御陪食の光榮を賜はったことがあるのにこんな目に逢ったのは遺憾だ」と話したとあるが、もちろん言葉遣いはまったく違ったものであったろう。興味深いのは、自分の素性を語りたがらない彼が、領事時代に出席した観艦式のことを語っている点である。また、佐々木は、モラエスが描いたタワシや蜂の巣の絵を持ってきて、何を描いたか当ててみなさいとクイズを出したこともあるとも語っている。佐々木家もモラエスにとって気安く付き合うことができた人たちであったようだ。

③ 「モラエス氏追想」

七回忌法要を前にした 1935 (昭和 10) 年 6 月 16 日に徳島毎日新聞に載った記事で、古角勝がモラエスの思い出を語っている。エピソードは前述の①—3「モ翁よ安らかれ」と同じく音楽会に誘った時のことだが、「お気の毒」と言われたことが「モ翁よ安らかれ」には書かれていなかった。

この記事では、モラエスが話す様子を「プカプカと吹かるる煙草の煙と共にポツリポツリと話さるる上手でもないしかし親しさのある日本語を危うく使うを伺いながら私はインドの詩人タゴールと人生を頭で交錯させながら神秘的な国に酔う自らをみました」と描写しており、モラエスの語り口の様子をうかがい知る貴重な情報である。

④ 「モラエス翁を偲ぶ座談会」

七回忌に際して、徳島毎日新聞も 1935 (昭和 10) 年 6 月 30 日に「モラエス翁を偲ぶ座談会」と題した座談会を主催し、その模様を紙面に伝えた⁶⁾。②の徳島日日新報が生前のモラエスをよく知る人物を集めて座談会を催したのに対して、徳島毎日新聞は法要に出席するため招かれた文学者、外交官、官僚などが中心となっている。前田正一、森房子 (旧姓濱本)、坂本章三は両方の座談会に参加している。モラエスの会話が出てくるのは、房子の談話のみで、亡くなる 3 日前の苦しいで孤独な様子が語られている。

⑤ 「街に残るモラエスさん」

「街に残るモラエスさん」は、1954 (昭和 29) 年 7 月 1 日に徳島民報が掲載した記事である²²⁾。この年はモラエス生誕 100 周年にあたり、その記念事業の一環としてモラエス翁顕彰碑が建立され²³⁾、その式典がこの日に催された。森房子 (旧姓濱本)、藍谷アヤ子、岩本朋三郎、岩瀬コウノの 4 人が語る思い出の中にモラエスとの会話が出てくる。森と岩本については前述したので、岩瀬コウノと藍谷アヤ子について記すと、岩瀬は近所で食料品店を営んでいた人物である。藍谷アヤ子は藍谷長三の妻で、夫である長三がモラエスと親交の深かった人物の一人である。長三は徳島の人間であるが、東京の大学に通っていた時の 1923 (大正 12) 年頃に東京日日新聞に出た岡本良知のモラエス紹介記事を読んで興味を持ち、徳島に帰郷した際にモラエス宅を訪ねて交流が始まった²⁴⁾。長三が徳島に戻ってから交流は続き、妻アヤ子もモラエスの家を何度か訪ねたと語っている。

⑥ 『モラエス案内』

本書は、モラエス生誕 100 年の記念事業の一環として徳島県立図書館が企画し、1955 (昭和 30) 年に発行された⁷⁾。モラエスに関する情報を網羅的にまとめた最初の本であり、研究資料として非常に価値が高い。

⑥—1 「モラエスの人と生活」

同書に載っている座談会「モラエスの人と生活」は、1955 (昭和 30) 年 6 月 14 日に催され、生前のモラエスを知る者として、花野富蔵、森 (旧姓濱本) 房子、古角勝、橋本富蔵、藍谷長三、立花マルエが参加した。注目すべきは、コハルの妹であり、コハルの死後にモラエスの身の世話をした齋藤ユキの娘立花マルエが参加していることである。齋藤家は、モラエスと関わりが深かったが、死後、悪く言う者があつたためか、モラエス顕彰の活動から距離をとってきた。齋藤ユキは、モラエスが徳島に住むことになったいきさつを最もよく知る者であり、またモラエスと最後に会った者でもあり、最も長く彼とつきあつた人物であるが、彼女の証言が伝聞でしか伝わっていないのは残念なことである。

この座談会では、モラエスが房子にバスの乗り方について尋ねるエピソードが興味深い。徳島市営バスが開業したのは昭和4年3月31日であり、モラエスが亡くなったのが同じ年の7月1日なので、亡くなる直前のエピソードであることが分かる。体力が衰え、歩くのも容易でなくなったモラエスがバスを利用しようと考えたことがわかるエピソードである。

⑥—2 「モラエスの印象」

同書では座談会とは別に、立花マルエ単独の談話も掲載されており、マルエがモラエスから求婚された話が紹介されている。

⑦ 『異邦人モラエス』

『異邦人モラエス』は、四国放送が1976（昭和51）年に作成した本である⁴⁾。表1に記したエピソードは、モラエスが頻繁に和菓子を買っていた日の出楼という店の子供松村益二の談話である。前述のようにモラエスは、おヨネとコハルの月命日に智賢尼を呼んで仏壇を拝んでもらっていたが、決まって日の出楼の羊羹を買って智賢尼をもてなした。松村は、前述②の「モラエスさんを懐かしむ座談会」において、主催の徳島日日新報の社員として座談会に出席して、モラエスが来た時の話をしているが、本書ではモラエスから店番をしている自分が褒められたという話を紹介している。また、モラエスの声の特徴や笑い声について、「その声は大きな、ひげだらけの老年にもにあわず、いくらか、かん高い女性的な響きがあって、話したあと、きつと、ほっほほと笑いました。」と証言している²⁵⁾。

松村は本書の出版時には四国放送の社長に就任しており、その後も1993年に「望郷リスボン」という番組を制作した。

⑧ 「楽し祭りよ、モラエスと子供衆」

1998（平成10）年に徳島で発行されたエッセイ集『ライフ—らいふ—life』に、森登紀子によるモラエスの思い出を記した作品「楽し祭りよ、モラエスと子供衆」が載っている²⁶⁾。「おいべっさん」として親しまれている徳島市通町の事代主神社に参拝に現れたモラエスに子供達がミカ

ンを投げつけ、それを知った大人たちに叱られて、モラエス宅に謝りに行ったという話である。時期は大正13（1924）年頃、彼女が10歳頃の話と書かれている。散歩中のモラエスに子供たちが悪さをする話はよく伝わっているが、モラエスはニコニコと受け流していた。ここでも謝りに来た子供たちに「アリガト、ダイジョウブヨ、ココデ、アソビナサイ」と笑って答え、優しさをみせている。

⑨ 「モラエスさんを語る」

2004（平成16）年4月18日に開催されたモラエス生誕150年記念「モラエスとハーン展」フォーラム「モラエスさんを語る」においてエッセイスト小野あづみがモラエスの思い出を語っている²⁷⁾。モラエスは筆まめで、ポルトガルの家族や知人に頻繁に絵葉書を送っており²⁸⁾、彼女の家が営んでいる本屋に毎日のように絵葉書を買いきていた。

3. 会話の特徴

よく使う言葉

表2にモラエスの発話において頻繁に出てくる言葉を示した。「よろしい」が最も出てくるが、「了承する」という肯定の意味で使う場合と「良い」という意味で使われる場合の両方が含まれている。拒否を表す場合は「いけません」という言葉が使われ、これも良く登場する。

2番目に多くみられたのが「かわいそう（可哀想、カワイソー）」である。これはモラエスの人間性を特徴づける言葉であり、特別な意味を持つことは著作『おヨネとコハル』の「コハル」の中に見ることができる。コハルは結核を患い、闘病生活の末に亡くなったが、四十九日までの間、親類知人たちが「神聖なことば、カワイソー（可哀想に）をふんだんに使って」彼女の噂をするという文章が出てくる²⁹⁾。一般の日本人は「可哀相」という言葉から神聖さを感じることはない。これを神聖な言葉だと思っているのはモラエスの独自の感性である。また、智賢尼や古角に「お気の毒」という言葉をかけているが、これも「可哀相」と同じ意味である。「気の毒」については、言葉

の成り立ちにも特別の関心を抱いたようで、晩年の著書『日本精神』において、日本語の特徴について解説しているが、複数の単語を接続して新たな単語を作ることが特徴の一つであると、その例として「気の毒」と「あいのこ」を挙げている³⁰⁾。そして「気の毒」については、「他人の迷惑や不興に対して感じる苦痛や哀しみ」であると解説している。

「可哀相」「気の毒」は日本語であるが、これに相当するポルトガル語は“piedade”であり、モラエスの代表作『おヨネとコハル』の主題となっている。彼は『おヨネとコハル』の前書きに、ピエール・ロチの *Les derniers jours de Peking* (邦題『北京最後の日』)³¹⁾ の中に出てくる孔子の言葉を引用して“A litteratura do futuro será a litteratura da piedade”と書いている。これは「未来の文学は piedade の文学である」という意味だが、花野富蔵は“piedade”を「慈悲」、岡村多希子は「敬愛」と訳している³²⁾。なお、ロチの原文はフランス語で“La Littérature de l’avenir sera la littérature de la pitié”と書かれていて、船岡末利の訳では“pitié”を「憐れみ」としている³¹⁾。また、本のタイトルの『おヨネとコハル』は、モラエスが愛した若くして亡くなった二人の女性の名前であるが、憐れみとともに死もまた重要なテーマとなっており、佐藤は『おヨネとコハル』はロチの“Le Livre de la Pitié et de la Mort” (邦題『死と憐れみの書』)³³⁾ に触発されて書かれたのであろうと指摘している³⁴⁾。

モラエスのこのような特徴は、執筆活動を始めた海軍時代からすでに表れており、刊行された第1作目『極東遊記』の序文を書いたヴィンセンテ・アルメイダ・デーサ (Vicente Maria de Moura Coutinho Almeida d’Eça) は、モラエスの作品の特徴として「人間のみじめさに対する深い同情」を挙げている³⁵⁾。

その以外の言葉としては「かわいい・可愛い」と「親切」が4回ずつ登場している。「かわいい・可愛い」の対象は子供、植物、猫であり、これらは彼の生活の一部であり、生活に潤いを与えてくれるものであった。モラエスは狭い庭で様々な植物や小動物を育て、鳥や猫も飼育していたが、中でもお気に入りには猫であった。「かわ

い・可愛い」は、出かけた先で見つけた花や猫にも向けて発したものである。「親切」は4回登場するが、智賢尼と多田ヨネの二人に対して向けた言葉である。

丁寧語

言葉遣いが丁寧なこともモラエスの会話にみられる特徴の一つである。証言者の語るモラエスの会話は、です・ます調で統一されている。これは、濱本房子をはじめ子供たちにたいしてもそうであった。丁寧語を使う習慣は、日本での生活の前半を神戸で外交官として送ったため身についたものだろう。さらに本で学んだ日本語であることも理由として考えられる。モラエスが日本語を教師について習ったとは伝えられて残っていないが、モラエスの死後、蔵書の中からフランス語で書かれた日本語会話の教本が2冊見つまっている³⁶⁾。

自著に出てくる日本語会話

ここまで日本人の証言の中から会話を抜き出してきたが、自著の中では日本人との会話はどのように描かれているであろうか。著作の中で日本人と話す場面がしばしば登場するが、多くの場合、それは間接話法で描写されている。まれに相手の言葉が直接話法で記されることはあっても、自分がしゃべったことが直接話法で書かれることはほとんどない。代表作の一つ『おヨネとコハル』では、日本での人々との交流の様子が多く描かれているが、それでも直接話法による会話が出てくるのは3箇所だけである³⁷⁾。その一つは、「着物？それともお金？一着物」という章であり、モラエスは家に遊びに来た少女千代子に次のように饒舌に語りかけている。

「私は、およそこんなふうに、前もって考えておいたことをいきなり彼女に話した。「千代子や、お前はよく知っているね、死者の祭りの『ボンニ』がもうすぐ来ることを。わしが日本の習慣にならって、この時季には毎年お前のおばあちゃんとお前にも新しい着物の生地を贈ることにしていることも、よく知

っているね。(中略)着物? それともお金?
千代子や・・・・」。

もちろん、これほど上手に日本語を話したはずはなく、ポルトガルの読者向けにそれらしく脚色して書いているのであるが、このような内容の会話をしたのは事実であろう。また、別の章「私の追慕の園で」の中では、病気の千代子を見舞った時に次のように語りかける場面がある。

「私は彼女に質問した。「こんど来るときには何をもってきて欲しいかい?」すると彼女は、口を利く大儀さを見るからに無理に我慢して、たったひと言で答えたが、非常な烈しさとすさまじい熱意をこめてそのことばを発した、—「ジャボン」!!—」。

あと一つは、「コハル」の章の中で、闘病中のコハルを叱りつけた「バカ」という言葉である。

「「バカ!・・・」と私は怒鳴る。そして、すぐに治ることを疑うような理由は何ひとつないことを、一生けんめい言葉をつくして証明しようとする — つらい役目をつとめているものだ!—。それから、私自身の持病についてことさら誇張して話す。」

原文は“Baka! Pateta!...”と記されており、日本語の読みと同じ意味のポルトガル語「Pateta」が並記されている。モラエスは、バカと言った後で、なおもコハルにいろいろと語りかけるのであるが、それは会話形式で書かれていない。

このように彼の言葉は、いったん頭の中で整理され、練り上げられたられた文章になって表現されている。モラエスの作品は、会話を積み重ねて物語を進めていくというスタイルをとらない。解説書のようなものを除くと、一貫して語り部として自分の胸中を吐露していくという作風であり、出てくる会話は状況をより印象的にするための添え物としての役割にとどまる。

従って、彼の日本語会話の能力を作品の中から判断することは、情報が乏しくて出来ないが、日常的に接する日本人とは日本語で話し、買い物や

外出などで用事を済ませるには十分な程度であったことはもちろん、時にはそれ以上の深い内容についても話し合うことがあったことは明らかである。

4. 会話能力について

モラエスの日本語会話能力についてまとめてみよう。証言者の語るモラエスの言葉は、表1のように、助詞を省いたり、動詞の活用をしないといった点が見られ、また、単語を並べるだけの場合も多く、今日われわれがイメージする日本語を勉強中の外国人そのままである。実際に、モラエスが日本語が達者であったという証言は出てこない。モラエスにインタビューした大阪朝日新聞記者の野上溪三は、「モラエス氏は素朴な日本語で語る」(資料①—4)と評し、古角勝は「ポツリポツリと話さるる上手でもないしかし親しさのある日本語を危うく使う」(資料⑧)と評しており、流暢でなかったことは間違いない。

会話能力には、発話の力とともに聞く力も含まれる。表1に挙げたモラエスの会話からは、発話の力についてはある程度推測できるが、聞く力について評価するのは難しい。「ビワ」を「イワ」と聞き間違えたエピソード(資料①—1)があるくらいで、他はどのような話をしたのか会話の内容から推し量るしかない。

モラエスに関する資料全般において、彼の聞く力を評価できるような情報は乏しいが、象徴的なエピソードが一つある。数多くのモラエスの著作を翻訳し、彼の伝記『モラエスの旅』を著した岡村は、『モラエスの旅』の中で次のように指摘している。「警察を通して著作権譲渡の依頼があったとき、最初ヴェンセスラウには相手の言い分が理解できなかった。言葉が通じないことを知って、警察署員はブラジル帰りの青年を通訳にして出直して来て、はじめてたがいに意思を疎通させることができた。この事実は、三十年もの長きにわたって日本に住まっていたとはいえ、彼の日本語力がかなり貧弱であったことを示している。日常生活に不自由しない程度の能力はそなえていても、それ以上の域にはおよばなかったのは、日本

人と知的会話をする機会がなく、彼自身それを求めなかったからである。」³⁸⁾

岡村が指摘しているように徳島に来てからのモラエスには、積極的に交友関係を広げていこうとする意思はなかった。彼にとっては、徳島で一緒に暮らし始めたコハルが3年あまりで亡くなってからは、徳島にくる直前に亡くなったおヨネとともに、死者となった二人の墓前で、空想上の会話を交わすことで満足であった。

それでも、日常生活において、近所の住人との交流を避けていたわけではなかった。モラエスの相手は、家に遊びに来ていた少女濱本房子や、「私が店へ出て来ると大層お喜びになりホチャホチャとなされてお話しを致します。先生は私を「米屋のおかみさん」と呼ばれ私だけにはなんでも申されました。」と証言している多田ヨネ、仏壇を拝みに訪れる智賢尼、愚痴をこぼしたり描いた絵を見せたりする佐々木新一の家族、冗談を言い合う隣家の橋本富蔵、全幅の信頼を寄せていた岩本朋三郎の存在などであった。彼らの存在はモラエスに生活の潤いを与えていたことだろう。岩本朋三郎の娘である岩本壽美は「顔なじみの人たちも道でモラエスさんに会うと、「おみち（散歩のこと）ですか」などと声をかけ、モラエスさんもニコニコと笑顔を返していたそうです。」と証言している³⁹⁾。

モラエスが近所付き合いを楽しんでいたことは、彼の著書『日本精神』からも分かる。そこには隣人たちとの交流について次のように書かれている⁴⁰⁾。

「隣人同士の仲は常によい。憤り、争いといったものは起こらない。それどころか、誰もががつとめて互いに丁寧にふるまおうとする。頻りに隣同士贈物を交わし合うのが習いである。私でさえ贈物をやりとりしている。これらの日本の隣人たちほど気持のよい隣人は世界中に断じていない。」（下線は筆者による）

ここに書かれている贈物のやりとりについては「モラエスさんを懐かしむ座談会」（資料②）で隣人の橋本が具体的に説明している。

橋本氏 「一寸持つていつでもいつも三倍位にして返して来るのです。それで私等は拵へたものを持つて行くことはなんでもないのですが向ふの方から返禮を貰はんがために持つて来るのではないのかと思はれはせんかて考へ却つて上げにくく何とはなしに氣がひけたのです（笑聲）然しそれでも何か拵へた時持つてゆきますとモラエスさんは非常に喜ばれました。

湯本部長 「どんなものを返して来るのかね」

橋本氏 「大概是玉子で又果物も呉れました、上げればすぐ買つて戻しに来ます、又菊の花の鉢植や苗木等を差し上げると大變喜んで大切に居られました」

また、「気持のよい隣人」というのは彼の周囲の人々に対する率直な感想であろう。そして彼自身もまた「気持のよい隣人」であるよう努めた。雄弁で高度な会話は存在しなくても、それは成りたっていたのである。

以上、モラエスの日本語の会話能力について資料に基づいて考察してみた。読み書きの方の能力については、いずれ稿をあらためて述べることにしたい。

註

- 1) Fidelino de Sousa de Figueiredo. *Torre de Babel*. Empresa literária fluminense. 1925.
- 2) 湯本二郎.『ウエンセスラウ・デ・モラエス翁』.モラエス翁顕彰会(1935).
- 3) 花野富蔵.『日本人モラエス』. 青年書房(1935). 1995年に青空社から復刊された。
- 4) 一方では、日本人になりきれなかったという視点で作られた『異邦人モラエス』（四国放送編

集・毎日新聞社発行, 1976) が出されている。また、リスボンのモラエス協会の Pedro Barreiros は、モラエスは日本で生活していても、生活の半分の時間は心はポルトガルにあり、ポルトガルの本、新聞、手紙を読み、故国で起きていることのすべて、複雑怪奇な政治や社会の情勢から、ケーブルカーの動きにいたるまでを知っていたと記している (Associação Wenceslau de Moraes. *Flora Nipónica no Jardim Botânico de Lisboa* (2017))。

5) 濱本房子編集発行『憂曇華』(1930)。

6) 「モラエス翁を偲ぶ座談会」は徳島毎日新聞社の主催で 1935(昭和 10)年 6 月 30 日に開催され、その模様は「モ翁を偲ぶ座談会」として 7 回に分けて同紙に掲載された。記事を切り抜いてまとめたものが徳島県立図書館に収蔵されており、本稿はそれを参照した。

7) 徳島県立図書館、『モラエス案内』. 19 頁(1955). 同書は 1995 年に徳島県立図書館により増補再販されている。

8) 石川榮作「モラエスが出入りしていた岩本さん宅を訪ねて」. 徳島大学総合科学部モラエス研究会編『モラエス顕彰による地方創生プロジェクト』論集第3号』. 40-44頁(2017).

9) 岡村多希子『モラエスの旅 — ポルトガル文人外交官の生涯』. 彩流社. 323-324 頁(2000).

10) 徳島県立図書館. 『モラエス案内』. 96 頁(1955).

11) 『憂曇華』の「ゆきし異域の孤客モラエス翁」(①—5) の中で、モラエスを紹介した記事「キク人ハナス人」が発表されたのは 1926(大正 15) 年と記されている。実際の記事は確認できていない。

12) モラエスの遺言状の原文はポルトガルで出版されたモラエスの伝記 *Os Amores de Wenceslau de Moraes* (邦題:『モラエスの恋』)

に載っている。(Ângelo Pereira and Oldemiro César 著. Editorial Labor, Lisboa. 116-122 頁(1937))

13) 吉田史郎. 「徳島県中央構造線沿いの「阿波の土柱」」. 『地質ニュース600号』, 62-65頁(2004).

14) 坪井 真. 「方面委員による組織的な運動の特性 — 全国方面委員大会(1927-1942)の内容の分析 —」, 『大正大学大学院研究論集34号』, 218-210頁(2010).

15) 佐藤征弥・高木佳美・石川榮作・境泉洋・宮崎隆義. 「モラエスの三つの絵葉書書簡集 — 絵葉書書簡からみえるモラエスの生活圏、旅行、信仰について —」. 『徳島大学地域科学研究第3巻』. 128-139 頁(2013).

16) 花野富蔵. 『日本人モラエス』. 185 頁.

17) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 岡村多希子訳. 『おヨネとコハル』. 彩流社(1989).

18) 渡邊華子「逝きしモラエス翁」婦女新聞 1519 号 (昭和 4 年 7 月 21 日発行)。四国大学図書館に収蔵されているものを閲覧した。『憂曇華』に載っているのは、漢字を平仮名に変えている箇所があるが、内容は同じである。

19) 前田正一. 『阿波月あかり』. 阿波郷土会 (1955).

20) 座談会の模様は 10 回に分けて徳島日日新報に掲載された。10 回分を一つにまとめた記事のコピーを徳島県立図書館で閲覧することができる (資料名: モラエスさんを懐かしむ座談会—徳島日日新報クリッピング)。

21) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 岡村多希子訳. 『日本精神』. 徳島日本ポルトガル協会(2014). 行水の場面は 87-88 頁に、朗読の場面は 183-184 頁に記されている。

22) 「街に残るモラエスさん」の記事は、雑誌『モラエス』第7号 (「モラエス」編集委員会編、モ

ラエス会発行、2004) に転載されている。そこには、掲載日が6月30日と記されているが、7月1日の間違いである。

23) 佐藤征弥. 「モラエス翁記念碑について」. 徳島大学総合科学部モラエス研究会編『「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集』第3号, 26-31頁(2017).

24) 藍谷はモラエスとの出会いについて座談会で語っている(『モラエス案内』98頁)。この時のことを徳島の新聞に載せたとも語っているが、記事は未確認である。

25) 『異邦人モラエス』188頁.

26) 森登紀子「楽し祭りよ、モラエスと子供衆」. 伊丹悦子編『ライフーらいふーlife(創刊号)』. らいふの会(1998).

27) モラエス生誕150年記念事業実行委員会編『21世紀に生きるモラエスー生誕150年記念事業の記録』, 39頁(2005).

28) モラエスが送った絵葉書や書簡については次に挙げる岡村の訳本や佐藤らによる研究がある。

ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 岡村多希子訳. 『ポルトガルの友へ・モラエスの手紙』. 彩流社(1997).

ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 岡村多希子訳. 『モラエスの絵葉書書簡』. 彩流社(1994).

佐藤征弥・高木佳美・石川榮作・境泉洋・宮崎隆義. 「モラエスの三つの絵葉書書簡集ー絵葉書書簡からみえるモラエスの生活圏、旅行、信仰についてー」. 『徳島大学地域科学研究 第3巻』. 128-139頁(2013).

29) 『おヨネとコハル』36頁.

30) 『日本精神』27頁.

31) Pierre Loti, *Les derniers jours de Pékin*, Calmann-Lévy, Paris (1901). 翻訳は船岡末利訳『北京最後の日』東海大学出版会(1989)を参照した。

32) ヴェンセスラウ・デ・モラエス『おヨネとコハル』. 花野富蔵訳は『定本モラエス全集IV』集英社(1969)の200頁、岡村訳は彩流社より発行された増補改定版(2004)の4頁にある。

33) Pierre Loti. *Le Livre de la Pitié et de la Mort*. Calmann-Lévy (1891).

34) 佐藤征弥. 「モラエスの憐れみのまなざしーロチ、ハーンを先達として」日本比較文学会第49回関西大会(2013).

35) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 花野富蔵訳. 『極東遊記』. 『定本モラエス全集I』. 集英社, 12頁(1969).

36) モラエス翁顕彰会編集発行の「モラエス翁蔵書・遺品展覧会陳列品目録」(1935)の中に以下の2冊の日本語会話の教本が載っている。

par Takuma Kuroda. *Petit cours de japonais pour faciliter l'étude du langage parlé*, Yokohama (1898).

Jean Cyprien Balet. *Grammaire Japonaise, langue parlée*, Tokyo, Librairie Sansaisha (1899).

37) 本文中の会話は『おヨネとコハル』の95頁, 179頁, 19頁に記されている。

38) 『モラエスの旅』, 322-323頁.

39) 岩本壽美・石川榮作「モラエスさんと父」. 徳島大学総合科学部モラエス研究会編『「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集創刊号』, 63-65頁(2015).

40) 『日本精神』, 90-91頁.

2018年9月12日受付
2018年10月3日改訂
2018年10月3日受理

表1 モラエスとの会話

	資料	会話部分
①	浜本房子編『憂曇華』(1930)	
①—1	「追憶」浜本房子	<p>「先生餘りたくさん木が茂ってゐますから少し切ってはどうか」先生「いけません。可愛さうです。生きてゐます」</p> <p>「先生今日は」と手を付いた時椅子の上でウトウトとお眠りの中先生のお目醒めになって「おゝこんにちわ」</p> <p>「先生これを」先生「其れ何です」私「ビワのなつてゐる木を持って来ました」先生「イワ云ひますか」私「いゝえ、びわと云ひます」</p> <p>先生「解りました。いゝですねさして下さい」「可愛らしいね、かわいゝね」と笑みをおもらしになった後「今日天氣少し寒いね」</p> <p>この初夏に寒いとは「先生私暑くて暑くてね、此通りよ」と汗をなで廻しました……が、ふと淋しさうな先生の視線とバッタリ逢つて「あゝ先生も随分おやつれになったこと」心の叫びを沈黙の中にお慰めする言葉もよう出さず正午前の事とて「先生又参ります左様なら」と歸りました。「話する宜しい」と言つて下すつたのも聞かず、忙しいからとて振切つて歸つた私—</p> <p>「先生行つて来ますわ」物思ひにふせつて居られる先生を下から見上げますと悲しみをお秘めになつて「買つて来て下さい」「行つて来ます」淋しい先生は妾の歸りをどんなにか足音數へて待つてゝ下さるであらうかと思へば走り、走り子供の様に「先生只今」「早いね、おまはん、早い足しとるサンキュ」破つて下さい私は二つの内一つを破りました先生は二本を取つて一本を私に「のんで下さい」にはとても困却しました。</p> <p>先生「私の國は油を入れてたきます、大根なます私大好きです」と申されました、私が遠慮しておつき合にしてみると「多くさんたべて下さい」とお自分の分を私に興えられました、み暖き先生なればこそ、隅の隅まで心付くのかと思へば感泣せずに居られませんでした「今日にぎわしくおいしかったです」と大へん喜ばれました。</p> <p>其の次の日訪れました時は少しよい着物を着て参りました、先生は上から下へとお眺めになつて「きれいですね日本の着物」と云ひつゝ昔をしのぶ人の様に撫で廻られました</p> <p>夏等私は簡單服で訪れますと「いけません日本着物きるよろしい」と申され何につけ純日本風が心から好かるゝ事を明らかに知りました</p> <p>先生「下へ行きませう」先生「待つて下さい」云ひつゝお立かけになりましたがたやすく立上る事の出来ない病に見舞われた、初病の頃でした急ぎ肩をお貸し申し助け合つてステップを下りました「サアどうぞ」先生に椅子をお進め申しますと「イケマセンくおまはん掛ける宜しい」と云つて再三再四お進めしても掛けて下さらぬので私も共に座りました「オマハン掛ける宜しい」それはく進められたので決斷力に強い私は辭退は失禮と一人でにきめて椅子にかけました</p> <p>先生は途中で通筆できず「私書けません」とペンを投げ出してフウンくそれは悲しそうな哀れなためいきついため息息！ため息をおもらしになつた「私思ひます暑くなります私體よくありません」又しても連發する悲しいため息よ如何にもお慰めする術も知らず。「先生になほりますきつときつとね」無意識におすがりしました「イケマセンく」と頭をおふりになつて私大變困りました。</p>

		<p>小學時代路傍の人として又珍しい人としてお氣の毒な事も考えず「イヂンサン今日わ」と面白がって友人とお呼びしてゐた彼の當時、先生はいつもニコくと「コンチワ可愛いね」と申されつゝ頭を撫でて下すった。</p> <p>「皆さん私の内遊びに来る宜しい」といつか申されましたので友人を誘って面白半分に遊びに行きました</p> <p>「皆さん歸ることよくありません遊ぶよろしい」</p> <p>私「あたし歸して來れんのだったら、明日學校へ行つて先生に申すんですよ」とモラエス先生をにらみました「オマハン學校好き」「エ、學校の先生だったらお母さんよりも好きよ」「學校先生私なつて上げます」「うそばっかし云つて此の異人さんわたしいなしてくれんの…なあ…きみさん」と云つて友人に歸る賛成を求めました「オマハン娘さんになったら教えてあげます、先生でせう」と仰しやるので「何教えてくれるの」「おまはん譯らん」あの時申されました</p> <p>過ぐる今に近き日「私病氣重くなりましたら……おまはん知らず來て下さる」私も喜び勇んでお受け致しましたにも拘らず唯の一度もる世話せずほいなくも逝つた先生</p> <p>私の前半生を楽しく暮らせて下すつた先生、殊に悩み多い私の身に「なやむより明日の喜びを思いなさる」と慰めて下すつた先生</p>
<p>①—2</p>	<p>「嗚呼モラエス翁」岩本朋三郎</p>	<p>翁と相知る日淺しとは雖も其の厚情の深厚なる、けだし數年の如かりき、翁病篤く再び立つ態はざるを知るや一日予に語りて曰く「我孤獨にして且つ異郷に假寓し頼るべきなし、君幸隣保の因を以て病翁終焉の日は諸事の隻者たらん事を庶幾す」予快諾辭して後思はず落涙す其後數次時事を談せしも只閑話に過ぎざりし</p>
<p>①—3</p>	<p>「モ翁よ安らかれ」古角勝</p>	<p>「今晚千秋閣に音樂會があるから行きませう。車で御送りしますから」と云つた時翁は「其處へは多くさんの人が行きますか」と問われ私は「そうです」と答へると彼は「私は多くさんの人をる處へは行きませぬ」と斷られた。</p>
<p>①—4</p>	<p>「ありし日のモラエス氏を訪ふ」野上溪三</p>	<p>モラエス氏は素朴な日本語で語る。三十五六年前ドリヲ、リマと云う小さい軍艦に艦長として日本に始めて來ました。五六年にして再び渡來して神戸で領事をつとめてゐました。文字はわからぬなりに朝日新聞はよく見てゐました。村山さんとも二三度遇つて知つてゐます。朝日新聞の訪歐飛行はよくやりましたな……左様です徳島へ來たのは大正二年ですが、二三度神戸と大阪に行つたほか老年になつたので旅行もしませんが、本年七十三歳です。日本の食物はなかなかよろしい何んでも食べます。日本食ばかりたべてゐますが徳島でも西洋野菜がよく手に入るやうになりました、刺身もよろしい……。</p> <p>「あの方は？」と佛壇に飾られてある三十歳ばかりの面長の美人の寫眞について尋ねると、「あれは神戸にゐたころの友人お米さんといふ人の寫眞です、ともだちです。徳島の人です」</p> <p>「この佛壇は友人（お米さんのこと）持つてゐたものです。キリスト教徒が來て見て驚いてゐます（佛壇を指す）日本については多くは知りませんが書いたものは十二三種もありませう（と二三を示して）古いものには大分間違ひもあります。若い時から國を出てもう生まれたポルトガルにも知人も少し親族も少なくなりましたし、それに遠方だから歸らうと思ひませぬ。……」語る言葉は悲痛だが感情は平淡で膝の上の白猫を愛撫してニコくしてゐるところ萬里の異郷にあるもの忘れたやうな靜かな生活だ。</p>

<p>①—5</p>	<p>「ゆきし異域の孤客モラ エス翁」小雙山房主人</p>	<p>子供好と見えて笑ひながら頭をなでたりするから子供は自然に馴れ親しんで逢ふ毎に西洋のおっさんよと聲を掛けると微笑しながら今晚はと軽く挨拶するそれが子供に非常な愛嬌であった。</p> <p>翁は微笑しながら--徳島好い處-私此の土地に永く居ります國に歸ることはありません親類少しあります、妹が一人あります……。</p> <p>徳島の風景が好い樹木の青々と繁って居る景致には非常に氣持がよい、阿波の神様古い忌部神社、阿波の一番貴い神さん、多賀の神さん日本の國の貴い神さんなど神社についての考が餘程印象深く考へられて居らるゝ様であった。殊に日本の國は本統に尊い立派な國柄である、こんな國に住む人民は幸福である—</p>
<p>①—6</p>	<p>「朝露追想」紫雲智賢</p>	<p>「小春も逝きました法名艶覚妙照信女と申します。これから二人一緒にお拝み下さい」</p> <p>前道に出ると「さよなら」と申されて奥へ入られます</p> <p>その節は申譯を致しますと「私かもみません宜しい」と仰せられて差つかへ時間如何を申される事御氣嫌お悪い事は只一度もございませんでした</p> <p>或る時十年前の梅の花咲く頃梅見をお進めしましたら、「私一度行きます」と申されました故法花という所より先の道、譯りにくいので道順をカ名でかきお渡し致しましたお言葉がお譯にくい故わからぬ時、かき付をお見せなされと申上げると大變およろこび下さいまして「貴女親切有が度う」ともうされました。</p> <p>又時間はお聞きしますと「私内八時出ますあなた九時十時間行きます」其れで當日お迎えに道まで参りますと見えられ『アナタ親切』と申されよろこばれて庵へこられ一番に本尊を拝され屋敷を御覽になられ「コゝ静よろしい」とおほめ下さいました。私は猫がすきで猫をかっておりました。其の時黒の猫でした、先生も猫がおすきで其の猫をお膝の上にだかれて慈悲のお目でも愛らし相に「黒さん可愛らしいな」とほめて下さいました。長々お話後「ココ静かよろしい佛壇此所まつてもらいます」と申されるので「小春さんのお身内に」ともうし上ると「いや私のものです。私の勝手です」と申されるので承知のお答えをして其れよりもまもなくお歸りになるとの事でお土産に梅、他の花を添へ差上げますと大變よろこばれました。</p> <p>お帰り道の大谷の梅林え御案内しました「アナタ親切」と又もお言葉にてよろこばれ御歸宅遊れました。</p> <p>其の後ケシの花を見にお越しになり「此の花可愛らしい」とお賞めになり</p> <p>私参る度々「アナタ御キゲン、黒さんきげん（黒猫）おとなりおかみさん（秋田町のおばさん）御きげん」とお尋ねがあります。「キゲンよろしく」とお答えすると「よろしい」と申され又稻のシツケより米になるまで麥の時も同じく経過をお尋ねでした</p> <p>雨天の時参りますと「道悪い可愛相」とお氣毒だ申されます。</p> <p>おそく行きますと「今日おそいかわいそう友達か内とまって歸りなされ」とお氣をつけ下さいます。</p> <p>色々お花を差上げますと「私すきうれしいアナタ親切」と非常によろこばれます。</p> <p>庵お越になり二三年たった時「私病氣の時葉書あげます来て下さい」と申されますのでお受をして居りましたがお變りもございませんでした</p>

		昭和四年七月一日モラエス先生も故人の一人となられ永遠に塵土を異にしてゆかれました先生のご死去三ヶ月前お言葉に「約束の佛壇渡します」と仰せられました。
①—7	「ゆきしモラエス翁」渡邊華子	近所の子供たちは翁の姿を見付けると、あちこちから走りよってきて、翁をとりまき「バンザイ」と手をあげる。すると翁もニコニコして「バンザイ」をされるのが常だった。 忘れもせぬ尼港事件の当時ある婦人會に席をおいてゐた私は遭難者ゐ族に贈る義損金を募るために一友人と共にモラエス翁をも訪ねた。私の言葉が通じたかどうか、翁は臺所の方へ行き竹筒の様なものをがちゃくさせたかと思ふと五十錢銀貨を一つ出して来て「少しです」といって渡された翁と語ったのはこの時だけ、只一度きりである。
①—8	「おゝ尊き方」花屋米店主人	だんごをこしらへてゐる私たちとお祭りの有様を御覧になられ「イソガシイネ」と微笑まれつゝお米の注文をしておかへりになりました 「米屋の伯母さんこさへた物頂きます」と仰せられましたので私は喜んで種々な物を揃えて参りました
②	徳島日日新報「モラエスさんを懐かしむ座談会」(1935)	多田氏：私以外の者には一言も申されず私が店へ出て来ると大層お喜びになりホチャホチャとなされてお話しを致します。先生は私を「米屋のおかみさん」と呼ばれ私だけにはなんでも申されました 多田氏：その他お祭りの時の御馳走、甘酒等を持って行きますと非常に喜ばれ「タクサン、アリガトウ」「オイシイ、オイシイ」「親切親切」(笑聲)と云ひながらすぐに召しあげられました。 多田氏：他所の家がお餅を搗ましたら先生が來られて「おもちクダサイ」といはれました 小出氏：先生に「お國には御兄弟でもあるのですか」と質ねると妹が一人居る、手紙は來ませんかといふと「來ない」國へ帰りたくありませんか「日本・ヨロシイ、カヘリマセン」と云はれました、 佐佐木氏：私の宅へも煙草を買ひに來ましたが煙草はハミルトンやチェリーを買はれてゐました。松村：煙草で刻みも喫って居られた筈です。森房子さん：ええ、いつも刻み一番オイシイと好んでゐられました 中山氏：ある時町内を飾るといふので各所から寄附を求めたのですが丁度モラエス先生の家だけは、早くから戸が閉まってゐたので町内の世話人が寄らなかつたところが翌の日になってそれを知った先生は自分のところだけ來てくれぬといつて非常に遺憾にしてゐた。それで世話人が集めに行つたが戸が閉まってゐたから止めにしたと譯をはなしたら「さうかそうだったのか」といって喜んで寄附をしてくれました。 森房子さん：何日でしたか私が先生をおたづねした時とてもこはかつたことが御座居ました、それは暗い部屋にモラエスさんが紺緋の鉢巻きして呆然としてゐました、その時が一番こはかつた、それで私はすぐ歸らうと思ったとき「コワイコト、アリマセン、私コレ頭イタイデス」と鉢巻きをしてゐる譯を話してくださいました。 橋本氏：妻がつわりを病みますと「隣のオクサンコレデスナ」と手を擴げてお腹の大きい形をするんです 森房子さん：先生の家の中には子供達で一杯でした、先生は本當に朗らかに子供と一緒に遊んでおられますがそのうち誰かがその邊りに置いてあるものにさはるとモラエスさんは「アナタソレハイケマセン」「イラウトワタシ、コマリマス」とおっしゃいます。

		<p>森房子さん：私達がなんでも教へて下さいと頼みますと「ワタシシリマセン」といひますが、私コレ知らなくって困りますといへばすぐ教えてくれました。</p> <p>多田よねさん：モラエスさんはよく人相を見られるのです。私が先生の所へ遊びに行くと、すぐ私の人相を見て「アナタ、カネモチ、ナリマス」又先生はお天気を見るのがお得意で「アスアメデス」と仰言すると必ず雨でした。</p> <p>佐佐木：本當にモラエスさんはお天気を見るのが上手で、測候所で明日は雨といふ天気豫報が出てゐてもモラエスさんが「アステンキデス」と仰言ふと翌日朝は降ってゐても夕方までにはきつとよい天気になる</p> <p>佐佐木：聖上陛下が皇太子殿下にあらせられた時徳島へ行啓遊ばされ忌部神社に御参拝になれましたが、そのときモラエスさんが奉迎に行くと巡査がモラエスさんに「ここへ來てはいかん」と云つて追つ拂つた。あとでモラエスさんは之を非常に残念がり、悲しがられて、私の宅へ來て祖母に私は横濱の軍艦の上で明治天皇に御陪食の光榮を賜はったことがあるのにこんな目に逢つたのは遺憾だ、とお話しされた事があります。</p> <p>中山氏：草を採つたり、樹を切ると「イケマセン、生キテマス カワイソー」（笑聲）いつかモラエス先生が私に「此裏にエビは居ないか」と聞くのです、ここには池もないのにエビは變だと思つたらエビぢやなくてヘビのことだつた（笑聲）</p>
<p>③</p>	<p>「モラエス氏追想」古角勝（徳島毎日新聞（1935年6月16日）</p>	<p>私は先生の死期がなんだか迫つて來るように思われたとある日人力車を雇い音楽會に行くべく誘ひました、しかし先生はカブリをふり人の多く集まる處へは行かないと断られ「オキノドク」と言われました</p>
<p>④</p>	<p>徳島毎日新聞主催「モラエス翁を偲ぶ座談會」（1935年6月30日）</p>	<p>森房子：私が娘の頃先生は「一度私の家へ遊びに來なさい」と申されたので先生の御家へついて参りました。</p> <p>森房子：私は先生の御苦しうなのを御察し致しまして「お訪ねする事はよします」と申しましたが先生は淋しいから是非來てくれと申されましたので亡くなる三日前にお訪ねしました</p> <p>森房子：先生は悲しそうな顔をして居られましたが、私が私が行きますと「其處に手紙が來てゐる様だから持つて來て呉れないか」と、私が行つて見て「ありません」と申しますと「炭俵の上か下駄箱の隅の方かも知れない」と言はれましたので電池を持つて行つて見ましたがありませんので「何もございません」と申しますとためいきをつけて非常に苦しうな表情をして居られました、それで私が「先生どこかお悪いのでしたら歸つてお父さんやお母さんに相談して参ります」と申しますと「悪くはない」と言つてかぶりを振つて「それには及ばないから一時間でも半時間でも居つてくれ」と申されましたが私も夜分に餘り遅くなるので歸りましたそれが最後の先生とのお別れでありました</p>
<p>⑤</p>	<p>「街に残るモラエスさん」徳島民報（1954年7月1日）</p>	<p>森房子：わたしたちがよく「大きなカシの木を伐つたら明るくなるのに・・・」と奨めても「木も生きています」と答え、力をぴしゃりとたたくと「イケマセン、ツキ（好き）マセン」と不機嫌だつた</p> <p>藍谷アヤ子：私があるとき訪ねて行つてモラエスさんの出ていらつしゃるのを待つ間、何気なくそのいすに腰を下ろしていましたが、ところが出て來たモラエスさんに私はひどくしかられました、「ソレ、小春サンノ椅子デス、スワツテハイケマセン」とおっしゃるのです</p> <p>岩本朋三郎：モ翁のよんだ人力代を私が払つたら「アナタハラツテハ イケマセン」としかられた</p>

		<p>岩本朋三郎：千秋閣でモ翁の法要した時ローガンさんがキリスト教式だと主張したが「シングラ オテラデ ソウシキ タノム」とくれぐれも頼まれていた私はモ翁の遺志どおり、どんどん仏式で執行した</p> <p>岩瀬コウノ：モラエスさんは頭のつかえそうなこの貧弱な店へよく買物に来ていただきました「ソレ、クダサイ」と品物を指さして「アリガト」と大きな手を開いたままでちょっと上げ、小さな買物の包みをぶら下げながら帰って行かれた背の高い後姿が今も眼に浮びます</p>
⑥	徳島県立図書館編『モラエス案内』（1955）	
⑥—1	座談会「モラエスの人と生活」	<p>橋本富蔵：樫の木のために神輿があつた町を通ってくれん。切ったならかわいそうだといってちよつとも切らなんだ。私がおらん留守にちよいちよい切っておくと戻ってきたら顔をしかめて怒っておつた。消防が担いでおつたお神輿が通ってくれんのは困るではないか、それをいいたてに切ってくれというのでモラエスさんに話をした。お神輿さんが通れんものだから覚悟をしたのだろうね。往来に出ておる枝を切った。「かわいそうな」と、格子の中で泣くようにしていました。</p> <p>森房子：あすこの家に行ったのは大正十三、四年ですね。お二階に行ったときには、偶然に行きますと、二階の手摺のところで下を眺めておりました。何時もノックしてから私の名前をいわなかったら開けてくれなかったのに、そのときは欄干から下を見ておつて、来るよろしいといつて。</p> <p>森房子：私はそこに始めて上がったときに私も何か教えていただきたいところだった。そうしたら貴方ローマ字書けますかといつたので、私は何も知らないので、何も知りませんといつたら、ローマ字を教えてあげますといつて、教えてくれるようになったのです。</p> <p>森房子：バスが始めて（ママ）徳島に通るようになりなりましたときに、徳島の地図を書いて一号線はどこに行く二号線はどこに行くというような案内書のようなものに優待券が各家に来ました。そのときに説明をしてくれというので行きました。銀行に行くのにどういふ線に乗ってどういふふうにしたらいいかとかこの券は何の券かと尋ねますので、これを出したらお金は要りませんと、三和銀行に行くのを教えましたけれども、お金を出さずして乗ることはいけませんといつてとうとう乗りませんでした。</p>
⑥—2	「モラエスの印象」立花マルエ談	<p>用件は、「姉の死後自分も淋しいし、身の廻りの事も不自由だから自分と結婚して呉れ・・・」と言うのです。</p> <p>前に申した様に私達家族が世間から冷い眼で見られる辛さが身にしみていますからキツパリと断つたのです。すると彼は暫く黙っていましたが、やがて、そんなら今の話は無つたことにして今迄通り遊びに来て呉れと云つて帰りました。</p>
⑦	四国放送編『異邦人モラエス』（1976）	<p>松村益二：わたしは大正の二年生れですから、ちいさいときですが、モラエスさんが伊賀町のすまいから、あまり遠くない金刀羅さんの家で、菓子屋をしているわたしの家へ、夕方、よく、おヨネとコハルに供える練羊かんやお菓子を買いにきたことを思い出すことができます。大きな手で、わたしの坊主あたまをなでて、「カシコイ、イイコデス」と、店番をするわたしを、よくほめてくれました。</p> <p>松村益二：その声は大きな、ひげだらけの老年にもにあわず、いくらか、かん高い女性的な響きがあつて、話したあと、きつと、「ほっほっほ」と笑いました。</p>

⑧	「楽し祭りよ、モラエスと子供衆」森登紀子（伊丹悦子編『らいふ』1998より）	「これ食べて」みんなで畳の上にお見舞いの品を置いた。彼はニッコリ笑い、「アリガト、ダイジョウブヨ、ココデ、アソビナサイ」とちょうど前にいた私の顔を毛だらけの大きな手で撫でた。
⑨	「モラエスさんを語る」、モラエス生誕150年記念事業実行委員会編『21世紀に生きるモラエス 生誕150年記念事業の記録』（2005）	小野ゑみ：幼いとき私はモラエスさんが来ていると聞くと店先に飛び出して行きました。するとモラエスさんは「お嬢さん」と言って、大きな手を頭にのせてくれました。

表2 モラエスの発話に出てくる日本語と使用数

資料	よろしい・宜しい・ヨロシイ	いけません	かわいい、可愛らしい	かわいそう	親切	ありがとう	気の毒
① 憂曇華	7	4	4	2	3		1
② 「モラエスさんを懐かしむ座談会」	2	2	0	1	1		
③ モラエス氏追想							1
⑤ 街に残るモラエスさん		3				1	
⑥ モラエス案内	1	1	0	4	0		
⑧ モラエスと子供衆						1	
計	10	7	4	7	4	2	2

同じ状況で発せられた言葉が別の資料にある場合は、重複しないように数えている。